カムパネルラ

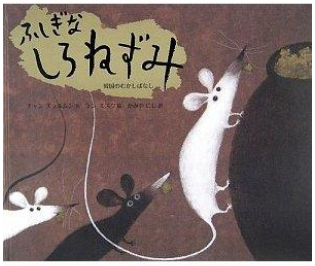
～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.30　2012年9月号

■ 既視のよろこび ー「ぼく知ってる」と子どもが得意になれる本ー・・・・・・・島森　哲男
■ 繰り返す力・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田　博
■ 「絵本」が放つメッセージの力――学生の時の思い出から――・・・・・・・・大友　きか子
■ 本当の優しさとは何かを教えてくれるこの一冊・・・・・・・・・・・・・・・・・齋藤　加奈子
■ 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田　博

■既視のよろこび ー「ぼく知ってる」と子どもが得意になれる本ー

島森 哲男



ここは韓国のとある村。外は雨。わらぶき屋根の小さな家。おじいさんは昼寝。おばあさんは縫い物。ふと見るとおじいさんの鼻から白い小さなねずみがちょろちょろ出てきて庭へ。でも水たまりで先へ進めません。おばあさんが縫い物のものさしで橋を架けてやると、ちょこちょこ渡ってずっと向こうへ。おばあさんはどこへ行くのかねぇとついていきます。するとみちばたに牛のふん。ねずみはそれをぱっくんぱっくん食べると、やがて田んぼを過ぎ、村を出て、山道にさしかかり、石垣の穴にふっと消えていきました。

おばあさんが家にもどってしばらくすると、あのねずみがもどって来ておじいさんの鼻の中へするするっと入ったではありませんか。やがて目覚めたおじいさんがいま見たおかしな夢の話をします。大きな川があって渡れずにいると、大きなばあさんが橋をかけてくれた。それからきびもちをしこたま食べて、しばらくいくとほらあなを発見。そこにはなんと…。それを聞いたおばあさん、そこへ行きましょうと、やおらおじいさんをひっぱって石垣へ。あなを掘るとなんと…。

白いねずみの動きを外から見ていたおばあさん。水たまりのものさし、牛のふん。ねずみの体験を夢として見ていたおじいさん。大きな川の橋、きびもち。あなの場所は知っているけれど中は見ていないおばあさん。あなの場所は知らないけれど、その中を夢で見ているおじいさん。この絵本の読者は3回同じ道をたどることになります。最初はおばあさんといっしょに、2回目はおじいさんの夢として、3回目は走り出したおじいさんとおばあさんを追いかけて。読者はすでに一度通った道をたどるのですから、立派な橋や山盛りのきびもちが何だか知っています。ちょっと得意な気分。ここに見える大きな手、だれのだか分かる？おかあさん。このきびもち、ふふっ、何だか分かる？「ぼく知ってる」と子どもが得意になれる本です。そして最後のページ。家は瓦ぶきで庭も広く、おばあさんの服も花の刺繍のチマチョゴリ。はじめは白い服だったのにね。あっ、見て見て！おばあさんの鼻から白いねずみが！どこへいくのかなぁ？　ついていってみようか、おかあさん。

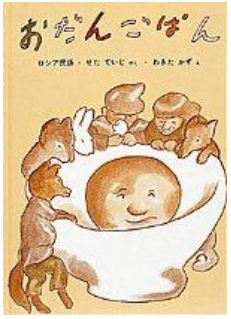
似た話は日本にもあります。田んぼで昼寝をする二人のお百姓さん。鼻から出てくるのはねずみではなくてチョウやハエ、アブ。田んぼの用水路。牛のくそ、馬のくそ。白ツバキの木の下のかめ(甕)。それが広い広い川を渡り、大ごちそうを食べて…、という夢に。水沢謙一著『蝶になったたましい』という本に新潟県の夢の民話としてたくさん集められています。

そういえば、おばあさんが水たまりに渡してあげたものさしには、かざり模様に北斗七星が彫られていました。北斗七星は運命の神さま。水たまり(境界／困難)を越え運命を開く橋をおばあさんは知らないうちに架けたのですね。

※「ふしぎなしろねずみ―韓国のむかしばなし―」チャン・チョルムン文／ユン・ミスク絵／かみやにじ訳／岩波書店
※「蝶になったたましい―昔話と遊魂信仰―」水沢謙一／野島出版　（国語教育講座）

■繰り返しの力

藤田　博



ロシア民話・せたていじ訳・わきたかず絵『おだんごぱん』（福音館書店）は、「こなばこを　ごしごしひっかいて、こなをあつめ」て、「だんごに　まるめて」、おばあさんが「おだんごぱん」を作ることに始まります。できたおだんごぱんが、「まどから　ころんと、いすのうえ。いすから　ころんと、ゆかのうえ。ゆかから　ころころ、とぐちのほうへ」転がっていきます。「おまえを　ぱくっと　たべてあげよう」と声を掛けてきたうさぎから逃げ出し、おおかみから逃げ出し、くまから逃げ出すおだんごぱんには、うぬぼれが積み上がっていきます。「ぼくは、おじいさんからも、おばあさんからも、うさぎさんからも、おおかみさんからも、それに、くまさんからも、にげだしたのさ。あんたからも、にげだすよ」きつねがおだんごぱんを「はなの　うえに」、「したべろの　うえに」乗せてしまうのは、それを利用してのこと。積み上げてきたものが、「ぱくっ」、一瞬にしてきつねの腹の中に納まってしまうのです。

ラトビア民話・うちだりさこ再話・すずきこうじ絵『ひつじかいとうさぎ』（福音館書店）の始まりはうさぎが逃げ出すこと。羊飼いが後を追います。つかまえてくれるようおおかみに頼むと、「じぶんで　つかまえな。」おおかみをなぐってくれるようこんぼうに頼むと、「じぶんで　なぐったらどうだい。」こんぼうを焼いてくれるよう火に頼むと、「じぶんで　やきなよ。」火を消してくれるよう川に頼むと、「じぶんで　けすと　いいわ。」川の水を飲んでくれるよう牛に頼むと、「じぶんで　のむんだな。」牛を食べてしまうようくまに頼む、これには「じぶんで　くうんだな」との答えが予想されます。その予想を裏切って、反転します。くまは牛にとびかかり、牛は川の水を飲みにかかり、・・・おおかみはうさぎをつかまえにかかり、そうしてうさぎは羊飼いの手に戻るのです。逃げたのはうさぎ、『おだんごぱん』では出会った最初がうさぎでした。そして、きつねの前がくま。くまのところで繰り返しの数が最大になり、積み上げの量が最大になっているのがわかります。うさぎで始まり、くまで反転に変わるところはないのです。

お母さんの誕生日のお祝いを探しに出た「だにー」は、何がいいかをめんどりに聞きます。「うみたての　たまごを　ひとつあげましょう。」「たまごなら、もうあるの」、そこで、「それじゃ、いっしょに」となり、「だにーと　めんどりは、ぴょんぴょん、かけていくのです。つづいてはがちょう、「わたしの　はねを　あげましょう。」つづいてはやぎ。つづいてはひつじ。つづいてはうし。「やまの　もりに　すんでいる　くまさんに　きいてみたら」となったところで、「わたしは、ごめん！」「わたしも、ごめん！」だにーは一人、くまのいる森へと歩いていきます。めんどりが、がちょうが、やぎが、ひつじが、うしがだにーの後についてくる、それでいてついてこないことが、一人のだにーを強調する、それ以上にくまの怖さを強調しているのです。「怖い」そのくまが「だにーを　だきしめて、ないしょで、おしえて　くれ」たものは、ハグをプレゼントすることだったのです。「あてて　ごらんなさい」と言われたおかあさんは、「たまごかしら？」「まくらかしら？」と繰り返すものの、「どうしても　わかりません。」すべてわかっている、読めているにもかかわらず、ハグがわからないのは、他のものとはそれだけが大きく違うことに加えて、くまが教えてくれたものということなのです。マージョリー・フラック文・マージョリー・フラック・大沢昌助絵・光吉夏弥訳『おかあさんだいすき』（岩波書店）の繰り返しの世界です。

まったく同じもの、わずかに形を変えたもの、繰り返されるものにはその二つがあります。積み上げと受け止められるのは後者です。繰り返しであって繰り返しでないこの形によってリズムがつくり出され、ネガティヴなものとしての繰り返しを逃れ、ポジティヴなものとの受け止めがなされるのです。次へとつながる期待、そこで引っくり返る期待、双方が生まれるからです。これは遊び特有のリズム、繰り返し、積み上げることがその遊びの世界へと誘ってくれるのです。

※おだんごぱん／ロシア民話・せたていじ訳・わきたかず絵／福音館書店
※ひつじかいとうさぎ／ラトビア民話・うちだりさこ再話・すずきこうじ絵／福音館書店
※おかあさんだいすき／マージョリー・フラック文・マージョリー・フラック・大沢昌助絵・光吉夏弥訳／岩波書店

（英語教育講座）

■「絵本」が放つメッセージの力――学生の時の思い出から――

大友　きか子

大学生の時、80名を越える児童文学の講義で、一冊の絵本を先生は読み始めました。淡々と読み進めていきました。教室は静まり返り、皆の視線が、小さな絵本に釘付けとなりました。

私は「絵本」が放つメッセージの強さ、深さに身動き一つとれなくなっている自分に気付きました。「絵本」との強烈な出会いでした。

『わたしのいもうと』 ――表紙には、背を向けて立つ、一人の女の子が描かれていました。いじめに遭い、ある日、その命の灯火が消えるまでの話です。

ごはんも食べず、何も語ろうとしない女の子。命の灯火が消えぬよう、抱きしめて一緒に眠るお母さん。時間が止まってしまったかのような女の子とは別世界に生きるいじめた子たちは、中学生になり，高校生になっていく･･･。

折り紙で鶴を折り始めた女の子。隣の部屋で、女の子と同じ鶴を、泣きながら折るお母さん。そして、ある日、女の子の命の灯火はひっそりと消えるのです。

先生が読み終えると、教室は時間が止まってしまったかのようでした。誰一人声を発することなく、先生も多くを語ることはありませんでした。

この講義の後、私は本屋さんへ向かい、『わたしのいもうと』を取り寄せました。松谷みよ子さんが、なぜ、これほどまでに強いメッセージを絵本に込めたのか、知りたかったのです。この絵本は、届いた一通の手紙から生まれたものだったのです。

手にして、私は二度目の衝撃を受けました。それは、絵です。柔らかなタッチ、それでいて、寂しさや悲しさ、怒りが胸に押し寄せてきたのです。『わたしのいもうと』との出会いにより、私が抱いていた児童文学や絵本のイメージは一変しました。

この講義での出会いがきっかけとなり、児童文学に興味を抱き、卒業論文で「小川未明」を取り上げることになりました。社会の中で起きている出来事や、人間が持つ多面性に目を背けず、考えるきっかけを与えてくれるのが絵本であり、児童文学のように思われてならなかったからです。

先生は、ある時は『アンネの日記』からアウシュビッツを取り上げ、戦争と平和について、ある時は、語り継がれる民話を取り上げ、人の暮らしぶりから生き方について考えるきっかけをくださいました。先生は、生きものを扱うかのごとく、児童文学の様々な世界を私たち学生に語り聞かせてくださったのです。

その中にあって、絵本『わたしのいもうと』は、今でも私に語り続けます。

一度閉じてしまった人間の心の扉は、なかなか開くことができないこと。どんな愛情でもっても救えない命があること。人間は、自分が犯した行為を忘れてしまう生きものであること。無関心であることが、加害者になり得る恐ろしさがあること。そして、子どもたちの心が柔らかな時期にこそ、考えるきっかけを与えるのが大人の役割であることを･･･。

大切にすべきものは、いつの時代も変わらないように思います。『わたしのいもうと』を思い出す度に、めまぐるしく変化する社会の中で生きる子どもたちに、少し足を止めて、考えるきっかけを作ることが、私たち大人に与えられた使命であるように思われてならないのです。

※「わたしのいもうと」／松谷みよ子文・味戸ケイコ絵／偕成社

（特別支援学校教諭）

■　本当の優しさとは何かを教えてくれるこの一冊

武田美穂作・絵『ますだくんの１ねんせい日記』（ポプラ社）

斎藤　加奈子

『となりのせきのますだくん』も『ますだくんの1ねんせい日記』も、ますだくんと隣りの席のみほちゃんの話です。2冊の違いは、みほちゃん目線かますだくん目線かにあります。前者では、ますだくんは恐竜の姿で登場します。みほちゃんがますだくんをいじわるな子と恐れているからです。算数の授業の時、答えが分かっているのに手を挙げないと、ますだくんは無理やり挙げさせようとします。頭が良くて、積極的なますだくんには、みほちゃんの自信の無さが理解出来なかったのかもしれません。後者を読むと、ますだくんの乱暴な行動は、全てみほちゃんのためを思ってのことであったのがわかります。本当はとても優しい男の子なのです。ますだくんに言わせると、みほちゃんは出来ないのではなく、逃げているだけ。それに立ち向かわせようとするますだくんの行動力が、みほちゃんには恐竜のように見えてしまったのです。

みほちゃんの誕生日会がありました。ますだくんのことをよく思っていないみほちゃんは、ますだくんを招待しませんでした。ますだくんは平気なふりをしていますが、面白くありません。次の日、みほちゃんは友だちからもらった鉛筆を大事そうに持ってきます。その鉛筆がますだくんの方へ。ますだくんが鉛筆を放り投げると、転がっていった鉛筆は、走ってきた男の子に踏まれ、折れてしまいます。みほちゃんは「ますだくんの！　いじわる」と大泣きしてしまうのです。鉛筆を持ち帰ったますだくんは、鉛筆を直し、謝る決心をするのです。しかし、鉛筆を真っすぐにするのは思った以上に難しいことでした。「ぼくってぶきようだったんだ　しらなかった　なあ・・・」と言うますだくん。ますだくんはみほちゃんの出来ない気持ちが初めて分かったのかもしれません。何とか真っすぐにと奮闘し、朝を迎えます。学校の門の所でみほちゃんを待ち構え、「ご　ご　ご　ごめんよっ」と謝ります。不器用で乱暴な謝り方ですが、気持ちはしっかりと届いたのでした。

ますだくん目線で読むことによって、ますだくんの優しさと強さがよく分かります。みほちゃんは気づいていないのかもしれせんが、ますだくんの少々乱暴な優しさと強さによって出来るようになったことがたくさんあるのです。ますだくんもみほちゃんと接していく中で、本当の優しさを身につけていくのだと思います。

（英語コミュニケーションコース4年）

■　新刊紹介

きむらゆういち文・田島征三絵『おもいのたけ』（えほんの杜）

オンドロロン、オンドロロン、洞窟から奇妙な音が聞こえてきます。誘われるようにして入っていったタヌキには、音を出すキノコがにくらしいキツネの顔に見えたのです。「こら！　そこのキツネ。ぼくは、あんたが　だいっきらいなんだ。」タヌキの叫び声を浴びたことによって、キノコは「ほんのすこしだけ　ムクッと　おおきくな」りました。つづいてやってきたリスの子には、同じキノコがお母さんに見えます。「あのさあ、かあちゃん。・・・なんで　いつも　がまんしなくちゃ　ならないのさ。」リスの子の叫び声を浴びて、キノコの数が「すこしだけ　ニョキニョキッとふえた」のです。しかし、キノコに向けられるのは悪口だけはありません。イノシシの男の子の顔に見えたブタの女の子は、募る思いを吐き出します。面と向かって奥さんに感謝のことばをかけられないヤマネコは、「ありがとう」と言うのです。ここには愛もあり、お礼もあるのです。それぞれがそれぞれに思いの丈をぶつけ、語ることで、キノコは「どうくつの　てんじょういっぱいにまで　ふくれあがっ」ていきます。それはふくれ上がる堪忍袋を思わせます。違いがあるとすれば、投げ入れられるのが悪態のみの堪忍袋に対して、悪態も愛もすべてを受け止めるキノコは、神様だということです。「たけ」（筍）、つまりはキノコに思いの「たけ」（丈）をぶつけ、聞いてもらう、そのためにキノコは「おもいのたけ」と呼ばれるようになったです。

キツネの悪口を言ったタヌキが、タヌキの悪口を言ったキツネが、祭りの行われる広場へと集まってきます。そこへキノコが、「じぶんが　さけんでるときの　かおになっておいかけてくる」のです。そして、「パーン」、キノコがはじけました。はじけたキノコは、神様から緒が切れた堪忍袋に。「どうぶつたちの　おもいも　キノコといっしょに　はじけちって　きえた」のです。キノコは胞子となって飛んでいきます。タヌキやキツネのところに「おもいのたけ」となってまたやって来るとすれば、日々のうっぷんが溜まった頃に違いありません。溜まったものを祭りに合わせてはき出す、はき出す頃に祭りを迎える、その意味で「おもいのたけ」は祭りそのものと言えるのです。

（藤田　博）

（発行：宮城教育大学附属図書館）